

いまさら聞けない！ 肝胆膵疾患

みなさんのギモンに答えます

肝胆膵疾患は自覚症状に乏しく発見や診断が困難であるという声を耳にします。しかし、疾患の構成や診断・治療が大きく進歩しており、最近の進歩を知っておくことが重要になっています。今回の企画は、主として若手医師が病院や診療所での実際の診療において、知っておいてほしい最近の進歩について、疑問に答えていただく形で、専門医の先生方にわかりやすく概説していただいています。

自覚症状を訴える患者が少ないので、身体所見のみかたが重要になります。ポイントとなる所見は必ずチェックするようにしましょう。

重要なのは血液検査から鑑別診断を進めることです。実臨床での血液検査の読み方は臨床経験が必要ですが、ある程度パターン化でき診断の手がかりとなる場合が多いため慣れておくことが必要です。

そして肝胆膵疾患では画像診断がポイントになります。腹部超音波やCTスキャン、MRIなど、どのモダリティをどんな場合に選択して、何をみていくのが重要になります。特に腹部超音波は肝胆膵疾患の診断に欠かすことができません。検査技師さんまかせにしないで、自分で習得してある程度の診断をつけられるようにすることが大切です。腹部超音波検査ではプローブの選択や患者さんの体位など基本的な事項を知っておくことも必要です。また、直接的な所見だけでなく、間接的な所見が診断のきっかけになることが多いと思います。

今回の特集では、最近増加している疾患や、診断・治療が進歩した領域について取り上げました。肝疾患では、肝炎ウイルスによるものは減少していますが、脂肪肝や薬剤による肝障害が増加しており、鑑別診断が重要です。また、胆道系疾患や膵疾患が増加し、自覚症状がない場合が多いため、最初に疾患を拾い上げることが重要なポイントになります。胆道系や膵疾患の診断や治療は急速に進歩しているため、各項目についてそれぞれ専門医の先生方にQ & A方式で理解しやすいように記載していた

いただきました。本特集を読んで興味をもった場合には、実際の診療の場面をみていただくことをお勧めします。超音波内視鏡による観察を実際にみると、MR 胆管膵管撮影 (MRCP) を行った場合に疑い病名が広がり、鑑別診断すべき疾患が挙がってくることが多いと思います。

肝胆膵疾患では、長らく悪性腫瘍に対する薬物治療の進歩が他領域に比較して遅かったのですが、今後ゲノム診断を要する薬物治療が入ってくると考えられます。新たな治療法が進歩してくることが期待されるため、Up-to-Date な知識を身に付けていただきたいと思います。

ぜひ、この特集を日常の臨床に役立てていただければ幸いです。

泉 並木 (武蔵野赤十字病院)